

上の繪具を用ひるのである。

フレスコに用ひる繪具については、最初板の上で混じた時分と、壁なり天井なりに用ひた後の色合とは、大に相違するもの故、美術家が欲する色が出ずに、豫想外の結果が生れる、此點は初めに大に注意が必要である。

次にフレスコに用ひる繪具の原料は、白い色は石灰石、其他の繪具は、礦物或は土質を持つた繪具を使用する事になつてゐる。動植物から製した繪具は、石灰のために變色する恐れがある。

さて如何なる色が用ひられるかといふに、鳶色にはアンバー、黒色にはコロソ、黄色にはオー、赤色にはパロントウオーカといふやうな色が適してゐる、其他種々な色がある。

次は道具である、筆は豚の毛で製した、油繪用よりも少し長いものが適してゐる。次に繪具を薄める處の水は、鐵氣のあるものはいけぬ、蒸餾水がよい。

さてフレスコといふものは、色の透明を尙ぶものであるから、深き注意を此點に拂はねばならぬ、若し此注意が不足であると、出來上つてから非常に汚ないものになる、それから、保存期限は随分永いもので、現に數百年前に拵へたものが、今日猶依然として残つてゐる、それは金のモザイクに次いで、永いものだといはれてゐる。

終りに、このフレスコに對して有害なものを少しく擧ぐれば、第一に濕氣、雨もりなどは最も惧るべきものである。或は下から騰る濕氣もいけぬ、これを防ぐには、アッスナル杯がよい。

第二は、繪の表面に凹凸のないこと、凹凸があると、凹んだ處に自然埃が溜り易い、それから變色を來す。第三は烟、烟草の烟りでも惡い、第四は直接に受くる太陽の光線、これだけは是非拒がねばならぬ。(以下略)

ラスキン奇談

M、O 生

ラスキンは實際の禁酒家であつた。ところが或る日宿の給仕にシヤンペンの半ダースと深い大きい皿を持って來いと命じたので給仕人は大に驚いた。さて命令通りに整へると、ラスキンは更にシヤンペンを靜に皿中に注ぎ入れて瓶を空にせよといひ付けて、自分は熱心に泡立ち沸騰する皿の内を凝視してゐた、次の瓶も其通りにさせて、遂に六本の瓶を空にしてしまつた。

其時にラスキンは給仕に向つて、「此酒はお前にやる、勝手にするがよい、併し一人で飲つて仕舞はぬが宜しい」といつた。

昔有名な畫家が、水中に小石を投げこんで水面に起る波紋を見て日を暮したといふ談があるが、ラスキンは、かくまで金と時間とを費してシヤンペンの沸騰するを見て畫學上の研究をしたのだ。

ラスキンは人爲的音樂と自然の音樂とのリズムを比較せんと企て、多大の費用を投じて倫敦から樂隊を呼び寄せて、屈吹き凄み怒濤逆巻くフォルクストーンの海岸に奏樂をさせた。